



Title	海外報告(1) ニューヨーク・ウイーン
Author(s)	稻田, 尚之
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 151-154
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(海外報告)

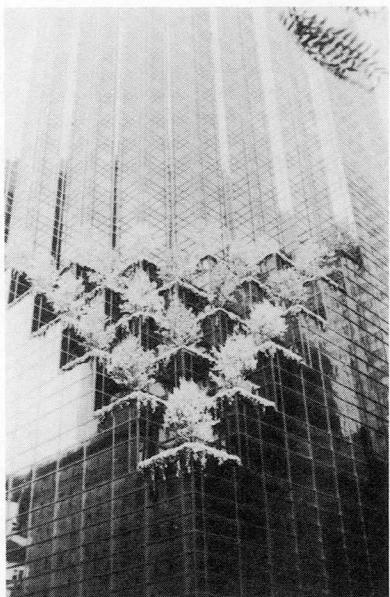
ニューヨーク・ワイン

稻 田 尚 之

ニューヨークは都市も面白いが、それよりも多様な人種を見ているだけで面白い。アメリカの大都会は皆同じ事が言えるが、特にニューヨークはその感が深い。

今回の旅は、東京でかかわっている大規模な“Interior Scape”の研究のために、都市、建築等と緑の関係を見て歩くことも目的の一つであった。

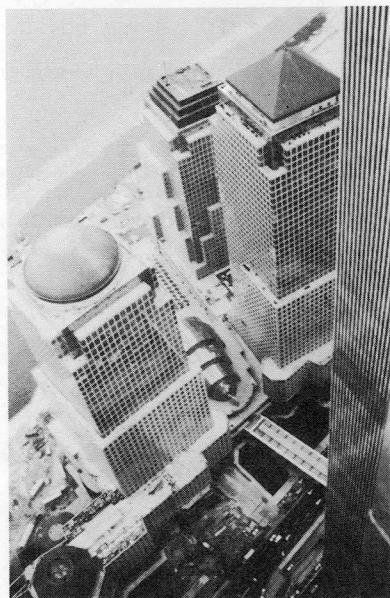
ニューヨークでは最近、公開空地利用の「Pocket Park」が各所につくられている。1966年、Lindsay 市長のもとに編成された「Urban design Group」により、デザインコントロールが行われるようになり、更に1982年、Koch 市長の交替を機会に詳細なデザインにいたるまで制度の改善が行われて今日にいたっている。「Paly Park」「Greenacre Park」等、Pocket Park は、1987年現在、MID Town で約25ヶ所、Manhattan 全体で約50ヶ所と言われている。それぞれに緑や滝をあしらってさまざまな工夫をこらしている。その他、「Trump tower」「Citicorp Center」「IBM Building」等の Atrium Spaces も室内公共広場として利用されるものが増加している。初期のフォード財團ビルの緑は当初より減少しているように感じられ緑にも生気がなかった。比較的 IBM の竹林が、のびやかに利用されているように見えた。最近日本でもさかんに紹介されはじめた「Battery Park City」は、まだ建設中ではあったが、Exterior の環境が未完成のせいか、意外に感動はなかった。とりあえず完成間ぎわの“Cesar Pelli”（東京のアメリカ大使館の設計者）の設計になる“The World Fihancial Center”をみた。石とガラスによるコンテクストの表現も単調でそれほど効果的とも思えなかった。黒い柱列の立つ“Gate House”もそれほどすぐれたデザ



トランプタワー



IBMビル



ワールドトレードセンターより
バツテリーパークを見る

インでもなく、またこのセンターの一つのポイントでもある“Winter Garden”的内部も Palm Tree が寒々と感じられた。

ニューヨークでは、ホイットニー美術館で、真紅や青色の巨大なゴム粘土を壁にぶつけたようなアブストラクトに辟易して、早々にボストン行のエアシャトルに乗り、夕方、次男の下宿の近くで夕食をとった。M I T とハーバートにはさまれたプエトリカンの多いこの地域では上等だと言う東京の周辺にもよくあるような郊外レストラン風の店であった。メニューを見ても、相変わらずのアメリカ風で仕方なく、ツナサラダとスライスオニオンをたのむと、出て来たものが、楕円形の大皿にぶつけて盛り上げたようなツナサラダと、スライスと言うよりも厚さ 1 cm ほどのカッティングオニオンがのっていて、あのホイットニーのアブストラクトがグーッとせまってくるようで、やはり、さすがアメリカだなーと感心はしたが、すっかり食欲を無くしてしまった。

ウイーンは菩提樹の花の香が風にただようすてきな季節にめぐり会えた。郊外の草原の白い野バラのしげみの囲りに可憐な野の花が咲きみだれていた。

今回はウイーン文化を取巻く周辺をたしかめたいと、特に食事もトルコ、バルカン料理なども食べ歩いた。やはりこれらも日本における中華料理のように多少ウイーン風になっているのであろうかなどとも思ってみた。

ウイーンの武器博物館には、かねがね関心があった。デザインと言うのは不思議なもので、殺人の道具である武器、つまり殺人の Function を持てば良いだけのものが、一番その国や民族の性格をデザイン的にあらわすと言うことである。刀を比べれば良くわかるし、又、最近では戦闘機や軍艦にもその国らしい雰囲気が不思議にみられる。ウイーンの武器博物館では、ここまで攻めて来たトルコ軍の刀や鎧の数々が陳列してあったが、これらを見ていると、ウイーン文化の背後に、東ヨーロッパからトルコまでの文化が強く感じられてくるよ

うな気がした。

ワインを去る最後の日、ヨセフ・ホフマンの墓にめぐり会えたのは、幸せであった。

私の恩師である上野伊三郎、リチ先生の師でもあるホフマンの墓は、ワインの中央墓地にひっそりとあった。

石板状の細長いその墓は、誰がたてたかは不明であったが、なんの飾りもない芝生の奥に簡素な姿でたっていた。